
複雑な関係 ～ childhood friend ～

姫野 みうな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

複雑な関係 ｝ childhood friend ｝

【Nコード】

N1054D

【作者名】

姫野 みづな

【あらすじ】

『琴音 俺と矧どっちにするか選べ?』いきなり放たれた一つの言葉。この一言で私【実生琴音】ミバエコトネの人生が変わろうとしていた。今、私が迷っている人物は双子で兄の【佐柏蓮】エギサレンと弟の【佐柏矧】エギサシンの二人だ。この二人の私にたいする想いが、私の心を揺れ動かす

プロローグ

『琴音　　俺と矧どっちにするか選べ?』

中三になった春の日のこと。

蓮と矧。二人の男の視線が、私に向けられる。

私と蓮、矧の三人は幼なじみである。

私が、中学三年生。

蓮と矧は、高校一年生の双子だ。

昔から、家族ぐるみの仲で大の仲良しだ。

……　　つたはずなのだが、今この瞬間この関係が壊れようとしている

第一話：蓮からの電話

それは、つい一時間くらい前のこと。

ルルルルル……。ルルルルル……。

携帯が鳴り響いた。

私は、携帯を手にとり、着信者が誰なのかを確認する。

《佐柏 蓮》 エギサ レン

蓮からだ……。

そして、通話ボタンを押し、携帯を耳にあてる。

「もしもし」と一言言つと

「おう！俺、蓮！」と明るい返事が返ってきた。

それに続いて

「琴音、今暇？」と質問も添えて。

私はすぐに

「うん。暇だけど？」と答えた。

すると

「じゃあ、今から俺ん家来れる？矧もいるんだけど」とお誘いの電話だったみたいだ。

佐柏家に行くのか……。

どうしようかな……。

正直私は迷った。

佐柏家には、蓮と矧の双子の兄弟。

その下には、杏ちゃんという末っ子の女の子がいる。

その末っ子の杏ちゃんが、私にとって癌なのだ。

私と蓮、矧の三人で遊んでいる時も

「杏もやる」と言っつて、邪魔してくる。

その度に、杏ちゃんも入れて計四人で遊ばなきゃいけない。

別に、そのことに対してはいいのだが、杏ちゃんが『ブラコン』と言っのには頭を悩まされている。

杏ちゃんは、私よりは年下だが今年で中学校に入った。

思春期、真っ最中のこの時期に高校一年生の兄を好きになるのだろうか。

そこで、私は思った。

杏ちゃんは、実の兄に恋をしているのではないのだろうか、と

そう考えている時

「琴音？」と携帯から声がした。

この一言で、私は現実に戻された。

そして

「杏ちゃんはあるの？」と何だか杏ちゃんがいると嫌！とも言うような言い方をしてしまう。

それに気づいたのか、蓮は軽く苦笑し

「大丈夫。杏は、友達ん家行ったから今はいない」と言い放った。

なので、私は

「うん！わかった！じゃあ行くね」と言い、蓮が切ったのを確認してから電話を切った。

第二話：いきなりの訪問

ピンポーン、ピンポーン。

二階にある私の部屋までにも、響くチャイム。

誰だろ……。

今から出掛けなきゃいけないのに。

と思いつつも、自然と一階へと足を運ぶ私。

「はい！」と言い、ドアを開けた。

すると、目の前にはさっきまで電話をしていた蓮。
その横には矧がいた。

その光景に、思わず私は一歩引いてしまった。

「引くなよな……てか、琴音いきなり開けんなよ！もし、変な奴だつたらどうするんだ？」と会ったそうそう蓮に説教された。

その横では、私達の光景を見てクスクス笑う矧。

矧が笑っているのに、気づいたのか

「笑うとこじゃないだろ！俺は琴音のために言ってるんだ」と、矧にも怒りをぶつける蓮。

「ゴメン、ゴメン！」と謝りつつも、まだ笑いを堪えきれずに笑っている矧を見ると、私から見ても謝っているようには感じない。

もちろん、蓮にもそう感じたのか

「何、笑ってる？！」と怒り気味で、矧に食ってかかる。

すると、矧が口を開き

「いきなり人の家に来るなり、説教じみたことをする蓮のほうが変な人だと思うけど？」とわりときついことを蓮に向かって放った。

その言葉には、さすがに納得したのか、蓮は少し顔を赤らめ

「琴音、ゴメン。いきなり怒っちゃって」とらしくないことを言った。

なので、私は

「別にいいよ、気にしてないし？それより、蓮も矧も中に入って！」と家の中に入るように言う。

蓮は何も言わず無言で、矧は

「おじやまします」と一言言っ、私は自分の部屋へと迎えた。

ふと、私の頭の中に一つの疑問が浮かんた。

どうして蓮と矧は、私の家に来たのだらうと。
自分が佐柏家へ行くことになっていたのに。

でも、今はそんなことはどうでもいいや。
と思い、考えないことにした。

第三話：二人からの告白

私の部屋に入ってきてからというもの、蓮と矧二人は口を開かず、部屋中は時計の秒針を刻む音だけが響いている。

さつきとは、まるで正反対で部屋の中には重い空気だけが漂う。

私は、その雰囲気を変えようと

「ところで、何があって私の家に来たの？」と明るく振る舞った。

すると、珍しく蓮じゃなく矧が口を開き

「琴音ちゃんに話があって来たんだ」と何だか深刻そうな話のよう
だ。

明るく振る舞った自分が、恥ずかしく思えてくる。

私は恥ずかしさのあまり二人の顔を見れなくなってしまった。

そしたら、次は蓮が口を開き

「琴音、真面目に俺らの話聞けよ？」と私に確認する口調で言ってくる。

いまだに、私は顔を上げることが出来ず、俯いたままだけれど「うん」と一応返事はしておいた。

蓮が深呼吸したのがわかった。

「琴音　俺と矧どっちか選べ？」
いきなり私に投げかけられた一つの問い。

「…えっ?…」

私はクエスチョンマークでいっぱいになった。

しばらくの間、また沈黙が続いた。

十分くらい経った頃だろうか……。

意外にも、初めに口を開いたのは矧だった。

「琴音ちゃん、僕と蓮ね、琴音ちゃんのことが好きなんだ」と恥ずかしそうに顔を赤らめて。

すると、蓮も矧の言葉に続き

「…ってことだ。だから琴音が選んでくれ」と真剣な眼差しで訴えてくる。

どうしよう……。

私の思考がうまく今の状況を掴めてないようだ。

第四話：崩れさっていく関係

「ゴメン……。今の私には、蓮も矧も幼なじみにしか思えないよ……」

蓮と矧には、悪かったが素直に思ってることを伝えた。

すると、案外蓮も矧も納得したようで

「そっか……」

「そうですか……」と一言だけ呟いた。

そして

「それじゃあ、俺達は帰るとするか」と蓮が言い

「そうですね」と矧も賛成し、二人は立ち上がった。

「ちよっ……ちよつと待ってよ!」

私は知らないうちに、二人を引き止めていた。

「何?」

不思議そうな顔で見てくる蓮は、どこか冷たい。

あんなこと言われた後だからなのか、蓮の顔がまともに見れない。

俯きながらも

「もうちょつと話そうよ」と声にならない小さな声で呟いた。

それでも、蓮は聞き取れたらしく

「無理」と一言冷たく放ち、ドアノブへと手をかける。

私は、その蓮が言った一言で胸が痛んだ。

ガチャン

蓮と矧、二人が私の元から離れていった

「琴音ちゃん？大丈夫？」

ふと、どこからか聞こえてきた声。

矧だ……。

私は、一気に二人を失ったような感覚に陥ったのか、ついに幻聴まで聞こえるようになってしまったのか。

結構、重症になってきている。

「琴音ちゃん？」

また矧の声が聞こえた。

私は、俯いていた顔を上げてみる。

「わあっ！！」

目の前には、矧の顔。

「えっ……??幻覚も?」

自分で自分の頬をつねってみる。

痛い……。

つねったところが、ジーンと余韻を残す。

「琴音ちゃん、幻覚じゃないよ!本物。てか、ほっぺた赤くなっちゃってるよ」と言い、心配そうに私の顔を覗きこむ。

「あっ…大丈夫」

私は、心配ないことを伝えた。

でも、矧はまだ心配なようで

「琴音ちゃん、氷借りるよ?今持ってくるから待っててね!」と私にっこりと笑いかけ、氷を取りに行った。

.....。

矧がいなくなった部屋には、私が一人ポツンと残された。

いつもと同じ光景が、まるで別世界のように思えてくる。

寂しいなあ.....。

第五話：矧への想い

ピロリン。

そう思っていると、受信を告げるメロディーが鳴り響いた。

《笹田 渚》 シノダ ナギサ

私と同じクラスで、ボーイッシュな感じの子。

渚には色々と相談に乗ってもらったりしている。

何の用だろ？

私はメールを開いてみた。

『琴音、今暇？ 琴音ん家行っている？』

二行だけの短い文。

どうしょっかな……。

今は矧がいるし……。

コンコン、コンコン。

「琴音ちゃん、氷持ってきたよ。開けていい？」

矧が来てしまったみたいだ。

そして、私は考えたすえ

「ちょっと待ってね」と矧を待たすことにし、渚に断りのメールを入れた。

「いいよ」

言った直後、すぐにドアがガチャリと音をたてて開いた。

矧は入ってきたそうそう、私の方へ駆けよってきて

「大丈夫？」と私の赤くなった頬にそつと氷を当ててくれた。

「ありがとう」

心配してくれて、氷を持ってきてくれたこと。
今、私の傍にいてくれること。
全てを込めて感謝した。

「いいえ」と矧は照れくさそうに言葉を紡ぐ。

矧を見ていると、弟みたいで可愛い。
まあ…私より、年上なだけだね。

そして、用事が終わった矧は
「じゃあ、僕も帰るね」と一言言い、ドアノブを引こつとする。

「一人にしないで……」

気づいたら、すごいことを言っていた。

一人にしないで……。一人にしないで……。

頭の中で繰り返される言葉

急に恥^づかしくなつて、矧^しから目を逸^よらしてしまつ。

第六話：矧の異変

「いいよ！僕は琴音ちゃんを悲しませることしないからね」と、さっきの言葉のことなんかまったく気にしていないようだ。

矧は蓮と違って優しい。

あらためて、そう感じた。

「矧は優しいよね。私、矧のそういうところ大好きだよ」
ニコッ！

私は、矧に最高の笑顔に向けた。

すると、矧は顔を手で覆い、一呼吸おいて
「琴音ちゃん……。今のは反則だよ」とボソリと呟いた。

「何が反則なの？」

わからない私は、矧に聞きだそうとする。

.....。

黙り込む矧。

えっ……??

何か気に触ることも言った？

不安と言う波が、私を襲う。

「琴音ちゃん。そんな可愛い顔すると、僕理性保てなくなっちゃうよ？ 僕も琴音ちゃんも、もう昔みたいには戻れないんだよ」

シーン

いつきに部屋が静まり返った。

『もう昔みたいには戻れないんだよ』

矧がそんな風に思ってたんだなんて……。

だんだんと矧の姿がぼやけていく。

私の目から一筋の涙が伝った。

今、私の目の前にいる矧はどこかが変だ。

私の知っている矧じゃない。

なんか怖い。

いつもの矧だったら、今みたいに私が泣いていたら慰めてくれただろう。

さつきもそうだ。

蓮と矧が部屋から出ていってしまったと思って、俯いてしまった時も『大丈夫？』って声をかけてくれた……。
氷を取りに行ってくれた……。

そんなに時間も経っていないはずなのに、まるで矧は別人のように変わってしまった。

第七話・見知らぬ男の子

「出てって……」

私の口から出た言葉は、矧がいることへの拒絶の言葉だった。

「わかったよ。じゃあね、琴音ちゃん！」

ニッコリとそう言い、ガチャリと音をたて矧は出ていった。

今日、一日のうちに色々なことが起きていて、私は混乱していた。

チラッと時計のほうに目をやると八時だ。

寝るのには、だいぶ早いが寝ることにする。

私は寝巻きに着替え、ベッドへと横たわった。「おやすみなさい」

誰かが居るわけでもないが、そう一言呟いて瞼を閉じた。

עֲדָה עֲדָה... עֲדָה עֲדָה...

響きわたる目覚ましの音で目が覚めた。

昨日、たくさん泣いたせいなのか目が腫れぼつたい。

「あゝやだなあ……」

そう思い、寝返りをうつと携帯に目が入った。

手を伸ばし、携帯をとろうとする。

ガチャン

いきなり開いた私の部屋のドア。

反射的にドアの方へと目をやる。

……誰…？

そこには見たことのない男の子の姿。

身長は高く、顔もすごくカッコいい。

誰もが彼に見とれるであろう程のカッコよさ。

その男の子が、今私の視界にいる。

「こんにちは、琴ちゃん」

そう言って、満面の笑みを浮かべる彼はモデルや俳優にでも、なれそうなくらいカッコいい。

「じっ…こんにちはっ！」

私は、緊張とドキドキ感で声が裏返ってしまった。

そんな私を見て、彼は微笑み私の方へと近づいてくる。

そして、私が寝ているベッドの上に腰かけた。

なんだかすごくドキドキする。

第八話：揺れ動く想い

「琴ちゃん、俺のことわかる？」

私のドキドキ感なんて、無視するかのように質問してくる彼。

「えっ……?? ごめんなさい。わからないです」

すぐさま謝罪する私。

すると、彼の顔は一気に曇った。

そして、

「マジ？ 琴ちゃん、酷いよ。俺達、昔はラブラブだったのにね」と意味不明なことを言ってくる。

この人、何言ってるの？

私の頭の中はクエスチョンマークでいっぱいになる。

.....。

私は思考が追いつかず、黙ってしまった。

すると、彼は私の手を取り、キスをおとしてきた。

当たり前だが、いきなり見ず知らずの男の子にこんなことをされたら、たまったもんじゃない。

私は、反射的に手を引つ込め

「やめて！」と彼の行為を拒否する。

案外、彼は納得した様子で

「ごめん」と一言だけ放った。

そんな彼を見て、何故だか胸の奥が疼く。

そして、いつもは自分の過ちを素直に認めない私だが

「何か、私の方こそ名前忘れちゃってごめんなさい……」と謝った。

彼の方を見るとニコツと微笑んでくる。

優しいんだなあ……。

といつの間にか、彼に興味を抱いている自分がいた。

「あっ！そうだ。俺の名前は椎名^{シイナ} 奏^{カナデ}。たしか、琴ちゃんの三つ上だったかな？」と忘れてしまった私に自己紹介してくれた。

椎名 奏……。椎名 奏……。

！！！！あっ、思い出した！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1054d/>

複雑な関係 ~ childhood friend ~

2010年10月9日00時04分発行